呉教会　四旬節黙想会　　2020 年 3 月 8 日（日）

第 1 黙想　10：00～10：50　ミサ 11：00～　昼食　第 2 黙想　13：00～13：50

四旬節の勧め　十字架の道行き：赦しの秘跡

参考文献　『宣教者を育てるイエス』　カルロ・マリア・マルティーニ著　今道瑶子訳　女子パウロ会　1988 年

『イエズス会　日本管区黙想会』　カルロ・マリア・マルティーニ指導　松本紘一訳　2000 年

第 1 黙想　イエスが十字架から差し出す救い　ルカ 23：32～43

ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。〔そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」〕人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」 兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、 言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」 イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」 すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。 我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」 そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。 するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

＜辱められるイエス　神の弱さの奥義＞

「お前を打ったのは誰か当ててみろ」ルカ 22：63～65

「この方は罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。」Ｉペトロ 2：22～23

２つの箇所は、イザヤ 53 章の「主の僕の歌」が背景にあります。

イエスを侮辱する兵士たち。実は彼らもいつもは権力に逆らえないで虐げられている人たちでした。ところが、今回は自分たちが弱い者をいたぶれます。自分より弱い者を目の前にしたときの卑しく残酷な本能が現れます。イエスは日頃のうっ憤を晴らすスケープゴートでした。

いたぶりながら彼らは考えたでしょう。「どうしてこの男は、やり返さないのか？」「なすがままなのか？」「預言者なら何かそれらしいことをするはずでは？」　イエスが何かをやり返すのを期待していました。　何もないのでがっかりしていました。

イエスは無抵抗だったことを聖書は記しています。
「なぜ私を打つのか？」（ヨハネ 18：23b）　ひどい仕打ちを受けながら、自分を打つ者に理性を取り戻させようとしています。「抑圧されているあなたの内面をよく見なさい。あなたは本当は何をしたいのか？」　沈黙でイエスは語ります。　イエスは心の中で彼らのために弁解しました。「していることのほんの少ししか彼らには責任がない」と。　十字架上で彼らのゆるしのために、ご自分を捧げます。「どうしてこんな弱さを通して神が表されるのでしょう？」

イエスに現われた神の弱さの奥義です。無言で苦難に耐える姿を、私たちは神の言葉として受け取ります。神の力は、人を癒すときだけに現されるのではありません。苦しむこと、謙遜、素朴、柔和に耐えるときにも表れます。耐える姿に深い尊厳が輝きます。人の尊厳は“権力の側”に現れるのか？　“苦難を耐える側”に現れるのか？　見極めなければなりません。

＜イエスが示す“仕える神の姿”＞
「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」（ルカ 23：36）
この箇所は、荒野でイエスが最初に受けられた誘惑と似ています。（ルカ 4：1～12）　「メシアとしての権能を自分のために用いよ」と誘惑されています。この誘惑の背後には、旧約を通して養われた「権力を持つ神」のイメージがあります。「もし、おまえがユダヤ人の王ならば、自分を救ってみろ。十字架から降りてみろ。」　「強い神、支配する神を見せてくれ！」と彼らは期待したでしょう。（日本人なら水戸黄門のように権力を用いて悪者をやっつけるのを期待していたでしょう）

相手の言いなりになって十字架から下りれば、皆が彼を信じるでしょう。けれどもイエスはそうはしませんでした。期待通りにしてしまえば、死を受け入れるほど人を愛する神の姿は伝えられません。強い神、成功する神の姿なら見せられるでしょう。けれども、仕える神、自分の命まで与える神、自分を無にする神の姿を見せられません。この**“仕える神の姿”**を示すためにイエスは来られました。
仕える神の姿、十字架上のイエスの姿が、私たちの生き方を変えていきます。自分のためではなく、人のために全てを与える姿をイメージさせます。十字架上のイエスは、極みまで人に仕える姿をイメージさせてくれます。

振り返りの質問
Q. 苦しみを無言で耐えて「人に仕える神（十字架上のイエス）」を想像してみましょう。「仕える神」を感じたことがあるでしょうか？　身の回りで苦しみに耐える姿で人に仕える姿を目撃したことがあるでしょうか?

＜犯罪人がこれまで生きて来た暴力・権力が支配する世界＞

2 人の犯罪人の箇所は、ルカ福音書だけが伝え、その一人が最後に回心します。犯罪人はずっと暴力の世界、強い者が勝つ世界で生きて来ました。けれども、自分よりも強い者（支配者）に負けて十字架に架けられました。心の中には、社会への怒り、恨み、悔しさが渦巻いていたでしょう。最悪の人生の結末を迎えます。

ところが、犯罪人の一人は、無言で謙遜に耐え忍ぶイエスを見て驚きます。暴力・権力にも動じない世界。強い者が勝つわけでない世界。そんなものを今まで見たことはありませんでした。

＜犯罪人の回心＞

隣の十字架にいるイエスは、自分の権力を使いません。神に委ね切って人生の最後を迎えようとしています。犯罪人には信じられないことでした。「われわれは、自分のしたことの報いを受けているから当たり前だ・・・」　イエスは、何もしていないのに、悪者の側にいます。

犯罪人の一人は自分たちとイエスは全く違うこと気付きます。これまで眠っていた正直な気持ちが蘇ります。イエスを信頼して「どうか私を思い出して下さい」と願います。

ルカ福音書でこれだけイエスが親しく呼びかけられている箇所は他にありません。使徒たちはイエスを「先生」とか「主」と呼びましたが、最後は逃げてしまいました。犯罪人の一人とイエスとは人生の最期、一瞬で友情関係を築きます。彼は、イエスを真の理解者だと直感しました。

「どうか私を思い出して下さい」　イエスの父への信頼、無限のゆるしに触れて**回心**します。十字架上のイエスに、神の力が働いていることを知りました。自分を救う力があると悟って「人生の最期を彼に任せよう！」と決心します。

ほんの短い時間に彼は変わりました。「あなたに言っておく。**今日**、あなたは私と共に楽園にいる」イエスが最期に回心に導いたのはこの犯罪人でした。人間は、いつでも回心できることを示しています。

この犯罪人は、イエスの癒しのわざを見ていません。受難の場面だけで、福音を信じました。神の栄光を十字架上で見ました。

振り返りの質問

Q. イエスのように悪いこともしてないのに、人から馬鹿にされる立場になったら自分はどうなるでしょうか？ やり返したい気持ちになるでしょうか？イエスの度量の広さを想像してみましょう。

Q.「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われました。受け入れてもらった強盗の気持ちを想像してみましょう。

＜私たち一人一人に与えて下さる救い＞

ルカ福音書は回心して救われる強盗のエピソードに重点を置きます。受難の最中に人を救うのはイエスの宣教活動の頂点です。けれども「救われたのはたった一人か？」「多くの人はそのまま家に帰ったではないか？」「十字架の意味を理解せずに引き上げてしまったではないか？」という疑問を持つかもしれません。

＜ルカ 15 章を参考に＞

どうして、たった一人の救いのために、イエスは不条理な死を遂げたのでしょう？　釣合が取れなかったのではないでしょうか？

救われた強盗の場面を、ルカ福音書で重要な 15 章と照らし合せてみます。

ルカ 15：1～3
さて、徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。

見失った羊、なくした銀貨、放蕩息子の３つのたとえ話が続きます。この３つは、元来一連のものとして読むものです。注目すべきは、十字架上でイエスが強盗に与えたゆるしに示される**“福音の神”**を理解する手がかりが３つのたとえ話にある点です。

これらのたとえ話では、１匹の羊、１枚の銀貨、１人の息子という具合に、どれを取っても**「１つ」**であることが強調されています。羊の場合は、100 頭のうちの「１頭」が大事、という常識はずれの不釣り合いです。

ルカ 15：4
「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。」

「どうしてたった 1 匹を探すために 99 匹を残していくのか？」という疑問が湧きます。この羊飼いは行き過ぎで狂気じみているようにも感じます。ところが羊飼いは、羊を肩に乗せ、大喜びで家に帰り、自分と一緒に喜んでくれるように友人や近隣の人々を招きます。行き過ぎに思えるこの箇所は、神がたった一人の人間、しかも一番小さな人間をどれほど大事にしているかを示しています。同じことが、他の 2 つのたとえ話でも強調されています。
たとえ話は、イエスが十字架上で、人々から見捨てられた強盗を救う神のイメージと重なります。たった一人でも、救いを必要とする者がいれば、神はどんなことでもします。あらゆる配慮をします。どのような努力・犠牲もいといません。もったいないことではなく、**一人の救いが神の喜び**です。これこそが**“福音の神”**の姿です。聖書では、救われた者の喜びがいつも強調されています。

「いっしょに喜んで下さい。」「祝宴を開くのは当たり前ではないか？」と人々と祝おうとします。これが“福音の神”の姿です。神は、世界万物を創り、全てを治めておられる方ですが、たった一人のために何もかも忘れ、たった一人が救われるまで安心されないのです。

このことをよくあらわしているのが「ここにいる幼児たちの一人でもつまずかせる者は災いだ」「あなたたちがもっとも小さい者たちの一人にしたことは私にしたこと」というイエスのお言葉です。救いの対象がたった一人でも、神様は喜ばれます。

神様のなさり方は、一律に平等を求める態度とは異なります。全体的な結果より、一人の救いを優先させます。

＜私たちのものの見方は？＞
私たちの反省として、全員であったり、より多くの人に気を配ることを優先しすぎる場合があります。また、多くの人に奉仕している時には、喜びが湧きにくいものです。たった一人でも大事、大きな価値がある、そんな愛のこもった神様の配慮を目指しましょう。“福音の神”は、誰一人おろそかにせず、忘れられず、傷つけられず、価値があるのを認るお方です。一人のために心を砕く方です。

振り返りの質問
Q.「たった一人」の救いを喜ぶ神様をイメージできるでしょうか？　自分も配慮されている一人、と感じられるでしょうか？

Q. 小さな者の救いを喜ぶ神様の心を、自分も体験しているでしょうか？

第 2 黙想　エマオの弟子　ルカ 24：13～35

ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起ったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、 遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。 仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。

二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

イエスは、不安を抱えている弟子に静かに現れ、弟子の心を燃やし、福音宣教が始まります。エマオの弟子の物語は、良き知らせ・福音を告げようとする私たちに深い示唆を与えます。

＜二人の弟子はどのような人物か？＞

原文では「彼らのうちの二人」とあります。彼らはグループの中でも「特別な立場」の弟子たちでした。初代共同体の中でも特にイエスに近い人々で、仲間からも期待されていました。けれども共同体が危機、不安の時に去っていきます。「私たちはだまされた。待っていても仕方ない。何も起こりはしない。」と幻滅して立ち去ります。

「論じ合っていた」「二人は暗い顔をして立ち止まった」などの言葉から、割り切れない思い、後悔の思いを抱えていたことを感じ取れます。

二人は、人生を賭けてイエスについた行ったことを「もう過去のこととして忘れてしまおう」とは思っていません。まだ、苦々しく思っているから口論しています。「どうしてこんなことになったのか？」と原因探しで論じ合い、分裂するところまできていました。期待をかけていた先生が殺される・・・思っても見なかった事態にうろたえていました。

私たちも、福音宣教に生涯をかける意気込みです。けれどもうまく行かないと動揺します。心が乱れ、誰かを非難したくもなります。けれども、司祭として・信徒としてこのように感じるのは、実は本物の証拠です。無責任な人なら、がっかりもせず、何かの気晴らしにさっさと逃げ込めばいいだけの話です。福音を告げることは、動揺したり、疲れたり、戸惑うこととセットになっていることが二人の弟子からもわかります。挫折したり、がっかりすることも、織り込み済みになっていきましょう。

＜イエスのなさり方＞

イエスは二人の弟子を励まし慰めるのに、4 つのことをしています。①話を聞き、②ショックを与え、③説明し、④最後にパンを割いて二人に奉仕します。

1．「話を聞く」

「彼らと一緒に歩き始めた」　イエスの方から近づき、歩みを共にされます。そして、しばらくの間、無言で歩調を合わせて歩かれます。二人が語ることを控えめな態度でひたすら聞きます。弟子たちの会話に、イエスは自然に入り込みます。イエスは「私はここにいる。私はイエスだ。私は

復活した。私を信じなさい。」とは言いません。「何のことを話しているのですか。なぜ悲しんでいるのですか。どう思っているのですか。」と控えめに尋ねます。

二人は「よそ者のあなただけがこのことを知らないのですか」とぶっきらぼうな態度を取られますが、イエスは気になさいません。無礼を受けても、忍耐と善意で話を聞き続けます。彼らの心の底にある問題を表現するように導きます。

イエスは「大丈夫。苦しいことは忘れなさい。」とは言わないで「なぜ悲しく辛いのか話してごらんなさい。」と言っています。これは非常に大切なことです。なぜなら、聞くことによって、二人がどんな思いでいるのか、言葉で表現させています。彼らはイエスの生涯と死、そして婦人たちの知らせのことも知っています。けれども、全貌を理解できていません。イエスは、弟子たちに話させることで、混乱した、がっかりした思いを説き明かしていきます。このように、イエスの励まし・慰めの第1歩は、「話しをさせること」です。他人を慰めようとする時に、これはとても大切なポイントです。イエスは、心に抱えていることや苦しんで原因を自分たちで説明させる機会を与えています。

＜中途半端なケリグマ＞

二人の弟子の会話は、驚くべきものです。ルカ福音書は、皮肉を込めて書いています。実は、彼らの会話は、信仰の中心部分（ケリグマ）です。生前イエスが告げていた内容（救いのメッセージ）がそのまま実現されていますが、彼らはそのことに気がつきません。災いのように悲しく告げています。彼らの態度を示す 17 節のスキュトロポイという言葉はマタイ 6：16 にも見られます。「断食する時、偽善者のようにくらい顔つきをしてはならない」と言っておられます。だから二人は、葬式のような顔をしていたのです。彼らは、ケリグマを口にしながら、それがケリグマであることを悟らず、逆に取り返しがつかないことが起きた、と受け止めています。これを中途半端なケリグマと呼びます。言葉そのものは、福音であっても、心が伴っていないのです。確信がなければ、福音は人には伝わらない見本です。

２.「ショックを与える」

励まし・慰めるためにイエスがされた２つ目のことは衝撃的です。イエスは弟子たちに「物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちに言ったことすべてを信じられない者たち」と言ってます。これは理解しづらいことです。慰めてもらいたくて私たちのもとに来る人たちは、自分たちの抱えていることや感じていることをただ認めて欲しいと思っていることが多いものだからです。けれども、認めてもらいたいと思っている人に、状況を逆転させなければいけない時もあります。人を慰める時に、相手にハッとさせたり、ものの見方を変えさせなければならない場合もあります。

相手は、「かわいそうに、周りの人に分ってもらえなくて、どんなに辛いことでしょう。あなたは間違っていない。私にはどうしたらよいか分からないけれど、お気持ちは分りますよ。」と言ってもらいたがっています。けれど、ショックを与えてチャレンジを求めることもあります。

「あなたは一部は正しいけれど、全部が正しいわけではありません。全体を理解すると見方が変わります。」と言わねばならない場合もあります。イエスは、はじめ二人に優しく接しましたが、彼らにショックを与えます。この２点目が非常に大切です。もちろん、難しい場合もあります。目の前で嘆く相手に「その通りです。お気持ちはよく分りますから、あなたのためにお祈りします。」と言う方が簡単です。でも、それ乗り越えないといけない時もあります。勇気のいることですが･･･。

３．「説明する」

ショックを与えて、足りないところを分らせた後、イエスは３番目に「説明」します。イエスは、二人が知っていることは、部分的で不十分なことをわからせます。**救い主（メシア）が十字架にかかる弱さは、失敗ではなく、“仕える神”を示すご計画**であることを、イエスは教えます。あなた方が「失敗」と思うことは、実は「イエスの勝利」だと説明します。イエスが苦しんだのは、預言者たちが語った通り“メシアのしるし”です。

「説明」によって、二人の弟子には心の変化が生じます。「考え方」だけでなく**「心」を変えます**。二人は、「わたしたちの心は燃えていた」と言ってますが、親切にされたから燃えたのではありません。神の計画がわかって、抱えていた重荷が軽くなって、希望が持てたから燃えたのです。この“心が燃えた体験”が福音宣教の始まります。

４．「パンを割いて奉仕する」

正しく「説明」した後、イエスは二人に奉仕しパンを裂きます。そこで二人は、目の前の人が復活したイエスだったと悟ります。イエスは「私は復活した主である。私はあなた方の前にいる。」とは言いません。自分たちで理解させます。話を聞き、ショックを与え、説明し、最後にミサを行うだけです。パンを裂くことで、最後の晩餐で厳かに行ったことを思い出させます。そして、二人の目が開いた“ミサ”にこんにちの私たちも与っています。

振り返りの質問

Q. エマオの弟子たちの箇所をこれまでどのように受け止めてきたでしょうか？　新しい発見がありましたか？

Q.　これまでの信仰生活の中で、ショックを受けて、心が燃えた体験がありますか？

＜復活したイエスの現れ方＞
復活された主は、控え目で、謙遜に現れています。それには２つの意味があります。

１．厳しい言葉を浴びせない
イエスは福音書で 13 回、弟子たちに出現しますが、厳しい言葉を言わず、慎ましく優しく現れています。弟子たちが逃げたこと、イエスを否定したこと、見捨てたことに憤りを示したり責めてはいません。イエスの言葉には、友に見捨てられた悲しさは少しもありません。喜びと広い心で弟子たちに現れます。
私たちに同じようなことがおきたら、思わず「悲しい」と言ってしまうでしょう。聖人のパウロでさえ、悲しい思いを口にしています。共同体のことでどれほど辛い思いをしたか語っています。Ⅱテモテ４：16～17 で、「わたしの最初の弁明のときには、だれも助けてくれませんでした。」この言葉には、孤独にされた非難が含まれています。続けて、「皆わたしを見捨てました。彼らにその責めが負わされませんように。」と言ってます。これが偽りのない言葉です。友に見捨てられた苦しみがどんなに大きかったかを窺わせる言葉です。一方、イエスはすべての友に見捨てられましたが、恨みを語っていません。穏やかで柔和に、自分の栄光を喜んで欲しい、と願って現われてます。これはイエスがどのように弟子たち、また私たちを慰めるか理解するために大切な点です。

２．慎ましい態度で現れる
イエスは慎ましく控え目に現れます。上から人を押さえつけるような態度は取りません。信じない人を愚か者扱いはしません。その代わりにイエスは“復活のしるし”を与えます。それは、イエスを信じる人は受け入れるしるしですが、他の人が信じなくても咎めはしません。これは言葉では説明しにくいことです。復活したイエスには、神々しい光を放っていたはずです。だから、公然と人々の前に現れて、“信じないではいられないようなしるし”を与えることもできました。けれども、そうはされませんでした。信じる者にしるしを示しましたが、信じないではいられないような示し方はしませんでした。

＜信じるダイナミックス＞
イエス様は、私たちの気持ちに反したことを押しつけようとはしません。私たちの自由を損なうのではなく、自由を応援するのを望んでいます。“信じるためのしるし”を示されますが、私たちの自由を尊重して過度に示すことはしません。神は信じないことなどあり得ないようなやり方で強要することはしません。人の自由意志を尊重してご自分を示されます。

「なぜ復活されたイエス様は、皆が信じるようにたくさんの奇跡を起こさなかったのでしょう？」これは“信じるダイナッミクス”と関係しています。“信じるダイナッミクス”は、私たちの自由と尊厳を守りながら信仰へとたどり着くプロセスです。イエス様も自由を専重し、育み、何も押しつけない神のイメージを示しています。神様は、私たちに強制的に信仰を押しつけません。

神様は、自由な心で信仰を選ぶことを望んでいます。イエス様のやり方は、信じられるように助け、しるしを与えるだけでした。そのしるしは、神を真剣に求める人が神と出会えるように計画されたものでした。

神様は、私たちが自由と真実を求め、信じるプロセスに加わることを望んでいます。

＜私たちにミッションを与える＞

復活されたイエス様は、ご自分の姿を現すだけでなく、私たちにミッションを与えています。イエス様は「私はここにいる。私はよみがえった。喜びなさい。」と言うだけでなく「行って宣教し、あなたの使命を果たしなさい。」と言われます。この使命感が、信仰生活でとても大切です。私たちが成長するのは、信仰体験を重ねるだけでなく、使命を与えられるからです。神様は私たちの尊厳を大切にされ、どんな時でも私たちに使命を与えます。いくつになっても「神様はいま私にどんな使命を与えておられるのだろう？」と、考える必要があります。

使命感を持つことは、健康な時、心身ともに元気な時にはやさしいことです。けれども、弱くなった時、病気や年をとった時には難しくなってきます。けれども、若い時とは異なる方法で自分の人生を神様に・人々に捧げられます。イエス様は「人生どんな時にも、あなたには、果たすべき使命がある。あなたの働きは、私にとって重要です。あなたは大切なことを成し遂げなくてはならない。私にはあなたが大切です」と言って私たちを励ましてくれます。

私たちは、使命感を持てるように、無力感やフラストレーションに負けないように、熱心に祈らなくてはなりません。「自分はもう役に立たない」という思いは、非常に大きな誘惑です。イエス様が、私たちに具体的な使命を与えてくださるように祈りましょう。

振り返りの質問

Q. 信じることを強制されない、神様のなさり方をどう思いますか？　これまで人にどのように信仰を伝えてきましたか？　今どのようなミッションを感じていますか？